

『参考源平盛衰記』写本書誌調査報告

岡田 三津子

知的財産学部 知的財産学科

(2009年5月29日受理)

Bibliographical study on “Sankoh-Genpeijyosuiki” (参考源平盛衰記) manuscript
by

Mitsuko OKADA

Department of Intellectual Property, Faculty of Intellectual Property

(Manuscript received May 29, 2009)

Abstract

This paper is a bibliographical study of “Sankoh-Genpeijyosuiki”, 11 manuscripts of which have been traced and are now available. The criteria for evaluating these manuscripts and others are also proposed.

キーワード； 参考源平盛衰記 源平盛衰記 写本 書誌調査

Keyword； Sankoh-Genpeijyosuiki Genpeijyosuiki manuscript bibliographical study

『参考源平盛衰記』写本書誌調査報告

目次

一 はじめに

二 写本書誌調査報告

- 1 国立公文書館内閣文庫蔵本（内閣A本）
 - 2 国立公文書館内閣文庫蔵本（内閣B本）
 - 3 静嘉堂文庫蔵本（静嘉堂本）
 - 4 宮内庁書陵部蔵本（書陵部本）
 - 5 彰考館蔵本（彰考館本）
 - 6 宮城県立図書館伊達文庫蔵本（伊達文庫本）
 - 7 京都大学付属図書館蔵本（京大本）
 - 8 東京大学総合図書館蔵本（東大本）
 - 9 無窮会平沼文庫蔵本（平沼本）
 - 10 鹿児島大学附属図書館玉里文庫蔵本（玉里文庫本）
 - 11 津市津図書館有造館文庫蔵本（有造館文庫本）
- 付 改訂史蹟集覧本
- 三 詳略二本の『参考源平盛衰記』（元禄本と享保本）

一 はじめに

徳川光圀（一六二八―一七〇〇）は、『大日本史』編纂事業に際して、異本の多い軍記物語を史料として活用するため、諸史料との対照検討を命じた。¹⁾それを承けて四種の参考本が編纂された。すなわち『参考保元物語』『参考平治物語』『参考太平記』『参考源平盛衰記』である。このうち『参考保元物語』『参考平治物語』『参考太平記』の三種は、元禄二年（一六八七）の完成後まもなく版行されている。『参考太平記』は元禄四年（一六

知的財産学部 知的財産学科 岡田 三津子

（二〇〇九年五月二九日受理）

八九）、『参考保元物語』『参考平治物語』は元禄六年（一六九一）の版行である。

これに対して、『参考源平盛衰記』の完成は、光圀没後の元禄十五年（一七〇二）のことであった。『水戸史館雜事記』元禄十五年閏八月三日の条には、『参考源平盛衰記』編集に携わった人々に褒美がくだされたという記事が見える。²⁾

一 参考盛衰記出来候ニ付於江戸御ほう美被下候向々

- | | |
|------------|--------|
| 銀三枚当日帰番被仰付 | 内藤 甚平 |
| 同二枚 | 一松 又之進 |
| 同一枚当日帰番被仰付 | 津田 平蔵 |
| 同一枚 | 森 丈介 |
| 同 | 内藤 六平 |

（以下略）

また、『参考源平盛衰記』にも、他の参考本同様に版行の予定があったことは、以下に示す正徳三年（一七一二）刊『参考太平記』最終丁所載の「彰考館訂本刊行目録」によって確かめられる。³⁾

- | |
|-----------------|
| 一 新編鎌倉志 九冊 |
| 一 医宗必読 十冊 |
| 一 参考太平記四十一冊 |
| 一 同保元平治十五冊 |
| 一 同源平盛衰記（入銀）五十冊 |
- （略）

元禄四辛未年二月二十五日

正徳三年癸巳正月吉日

六角通御幸町西入書林多左衛門

しかし、結局『参考源平盛衰記』が刊行されることはなかった。元禄十五年の完成後も、編纂・改訂作業が続行されたことが、最も大きな原因であったと考えられる。⁽⁴⁾その改訂作業は長期に亘り、浄書本が幕府に献上されたのは、享保十六年（一七三一）九月のことであった。⁽⁵⁾元禄十五年に完成していたはずであるが、その後さらに三〇年の歳月をかけて改訂作業が続けられたことになる。

現存する伝本がすべて写本であることから、『参考源平盛衰記』は浄書本の完成後も版行されないままであった可能性が高い。

江戸時代の『源平盛衰記』享受実態の解明には、『参考源平盛衰記』の成立およびその流布について検討する必要がある。しかし、従来の研究においては、それほど注目されることはなかった。⁽⁶⁾

本稿では、現存『参考源平盛衰記』伝本の書誌調査報告を行う。次に代表的な二本について比較を行い、現存伝本の系統分類の基準とする。さらに、個々の伝本の位置づけについて大まかな見通しを述べる。

二『参考源平盛衰記』写本書誌調査報告

『国書総目録』所載の『参考源平盛衰記』写本は、十三本にのぼる。このうち、所在が確認できた伝本は十本である。⁽⁷⁾また、津市津図書館には『国書総目録』に未掲載の一本が伝存している。⁽⁸⁾

以下に現存『参考源平盛衰記』伝本の書誌調査報告を行う。所蔵の下の括弧内は伝本の略称を示す。また、各伝本の末尾に記した調査年月日は、当該伝本を最初に調査した日付である。伝本によっては、その後何度も調査を重ねたものもあるが、煩雑を避けるために二度目以降の調査年月日は省略に従う。

1 国立公文書館内閣文庫蔵本（内閣A本）

請求番号 167 / 44

写本

冊数…完本 五〇冊（首巻一冊・剣巻一冊・巻一から巻四十八各一冊）

本文紙質…楮紙

製本様式…袋綴 綴糸…白（後補）

帙・箱…ナシ

表紙体裁…原 浅黄・無地

大きさ…縦・28・4 糎 横・18・5 糎

見返し…本文共紙

題簽…楮紙 縦・18・1 糎 横・3・4 糎

参考源平盛衰記一（～四十八止）

内題…参考源平盛衰記卷第一（～卷第四十八）

目録題…参考源平盛衰記卷第一目録（～卷第四十八目録）

尾題…参考源平盛衰記卷第一終（～卷第四十八終）

校訂者（各巻の巻頭所載の氏名）

魯齋今井公濟將興甫 考訂

著軒内藤貞顕仲微甫 重校

砥齋栗山平 担叔甫 重校

引用書目…通計百十六部

本文字高…21・6 糎

半葉（一頁）九行

本文仮名用字…カナ

清濁・振り仮名・句読点・符号・墨減・書入・貼紙・奥書…ナシ

印記

各冊一丁表右下・二丁表中央下・最終丁右下「日本政府図書」

各冊二丁表（本文第一丁）右下「彰考館」・「浅草文庫」

備考

1 浄書本。四八巻附剣巻 今井弘済等校、写

2 首巻表紙に「軍記一ノ三」の貼り紙

（二〇〇六年八月三日調査）

2 国立公文書館内閣文庫蔵本（内閣B本）

請求番号 167 / 39

写本

冊数…五〇冊（二種の取り合わせ本。①②と区別して示す。）

① 首巻一冊・巻二から巻八の十一冊（巻三から巻五は上下二分冊とする）

② 首巻一冊・巻九から巻四十八三十九冊（巻四十五欠）

本文紙質…楮紙

製本様式…袋綴

綴糸…白（後補）

帙・箱…ナシ

表紙体裁…薄茶横刷き目

大きさ…① 縦—26・4 ㎝

横—19・3 ㎝

② 縦—26・4 ㎝

横—18・8 ㎝

見返し…本文共紙

題簽…楮紙 縦—18・2 ㎝ 横—2・8 ㎝

参考源平盛衰記一（～四十八）

内題…参考源平盛衰記巻第一（～巻第四十八）

目録題…参考源平盛衰記巻第一目録（～巻第四十八目録）

尾題…参考源平盛衰記巻第一終（～巻第四十八終）

校訂者（各巻の巻頭所載の氏名）

① 魯齋今井公済将興甫 考訂

著軒内藤貞顕仲微甫 重校

砥齋栗山平 担叔甫 重校

② 魯齋今井公済将興甫 考訂

著軒内藤貞顕仲微甫 重校

引用書目 ① 通計百十六部

② 通計百四部

本文字高

① 21 ㎎

② 17・5 ㎎

半葉（一頁）行数…九行

本文仮名用字…カナ

清濁・振り仮名…マレ

句読点・符号・墨減・書入・貼紙…ナシ

奥書

巻八最終丁裏

右自巻一至巻八（十一冊）明治九年小河一敏山城大和出張中／

謄写

巻四十八最終丁裏

右自巻一至巻八（十一冊）明治九年小河一敏山城大和出張中／
謄写

首巻及従巻九至巻四十八（巻四十五欠）徳川昭武本補写

* 巻八最終丁裏とは別筆

巻四十八最終丁裏左下部

「校畢」と墨書し「樹下」の朱丸印を捺す。

* 二種の書写奥書とは別筆。

印記…各冊一丁表右下・二丁表上部中央「修史局図書印」

各冊二丁表上部「日本政府図書」朱角印

各冊二丁表（本文第一丁）右下・最終丁裏「内閣文庫」

備考

1 取り合わせ本。下小口に「参考源平盛衰記一（～四十八）」と墨書で
通し番号をつけている。「参考源平盛衰記一」は首巻（凡例・目録）に
あたる。巻八までの十一冊は、他の冊に比して五ミリほど幅が広い。ま

た、巻九以降の三十九冊は、本文共紙の表紙をつけた仮綴であったもの
に、新たに表紙をつけている。以上のことから、いずれかの時点で同一
書と認定し、同じ体裁の表紙をつけ、取り合わせたものと考えられる。

2 徳川昭武本は、明治十五年（一八八二）の改訂史蹟集覧本出版の際に
底本として用いられている。内閣B本の巻四十八最終丁裏に言う「徳川
昭武本」と、史籍集覧本の底本は、同一のものであったと考えてよい。

（二〇〇六年八月三日調査）

3 静嘉堂文庫蔵本（静嘉堂本）

請求番号…2—573／49／516—1

写本

冊数…完本 四九冊（首巻一冊。巻一から巻四十八各一冊）

本文紙質…楮紙

製本様式…袋綴

綴糸…葡萄茶（全冊綴じ直しの跡あり）

帙・箱…ナシ

表紙体裁…原 縹無地

大きさ…縦—27・6 ㎝

横—19・2 ㎝

見返し…本文共紙

題簽…楮紙 縦—18・1 糎 横—3・4 糎

参考源平盛衰記一（～四十八）

内題…参考源平盛衰記卷第一（～四十八）

目録題…参考源平盛衰記卷第一目録（～四十八目録）

尾題…参考源平盛衰記卷第一終（～四十八終）

校訂者（各巻の巻頭所載の氏名）

魯齋今井公濟將興甫 考訂

著軒内藤貞顕仲微甫 重校

砥齋栗山平 担叔甫 重校

引用書目…通計百十六部

本文字高…22・5 糎

半葉（一頁）行数…九行

本文仮名用字 カナ

清濁…ナシ

振り仮名…マレ

句読点・墨減…ナシ

書入…マレ

貼紙…ナシ

印記…各冊一丁表右下「松井藏書」・「賜蘆文庫」

各冊二丁表右下「静嘉堂所蔵」

備考

- 1 賜蘆文庫は幕末の弘前藩士新見正路の蔵書である^⑨。静嘉堂文庫には正路の蔵書目録『賜蘆蔵書目録』（写本三冊）がある。その「雑書九」の項に「参考源平盛衰記 写五十冊 合十三冊」と記している。これによつて該本が新見正路旧蔵書であったことが確かめられる。さらに、現在は四十九冊であるが、元来は「剣巻」一冊も併せ持っていたと推察できる。早稲田大学蔵写本『賜蘆書院蔵書目録』（転写本）・内閣文庫蔵写本『賜蘆書院蔵書目録』（転写本）にも同様の記述がある。
- 2 凡例には他の参考本同様、十一種の対校本を掲げるが、齋田本・烏丸本・慶長本・活字本・奈佐本など、凡例に記さない伝本を注に用いている。以下にその例を掲げる。

【例1】平文ノ狩衣（齋田本狩衣作直垂）（巻十「中宮御産事」）

【例2】成頼ハ高野ノ雲ニ身ヲ交ヘ（烏丸本云、宰相入道成頼ハ、高野ノ霧ニマシハリ、民部卿入道親範ハ大原ノ霧ニウツモレテ云々）（巻十二「静憲参鳥羽殿事」）

【例3】十五年ノ（五年当作四年、慶長本作十四年為是仁安元年至治承三年実十四年）（巻十二「行隆召出事」）

【例4】木曾カ嫡子清水（活字本作妙美水）（巻二十八「頼朝義仲仲悪事」）

【例5】齋宮女御（長門本作大宮女御如白本紫野女御奈佐本柴野女御並無所考）（巻一「得長寿院導師事」）

例4に示した活字本は、『源平盛衰記』古活字本を指すと考えてよい。古活字本において「妙美水（しみず）」の用字のあることが確かめられるためである^⑩。

齋田本・烏丸本・慶長本については、現在のところ未詳であるが、注の在り方から当時流布の『平家物語』伝本であると考えられる。

これに対して、奈佐本の本文は、古本系盛衰記伝本のうちB系写本の本文と一致している^⑪。享保十六年の浄書本完成後、何者かが新たな注を加えたものと考えられる^⑫。

静嘉堂本については、稿を改めて論じる予定である。

（二〇〇八年三月二日調査）

4 宮内庁書陵部蔵本（書陵部本）

請求番号…254/170

写本

完本二四冊（第一冊には凡例・総目録・剣巻・巻一・巻二を合冊する。

巻三以降、二巻一冊とする）

本文紙質…楮紙

製本様式…袋綴 綴糸…薄茶

帙・箱…ナシ

表紙体裁…原（薄茶無地）

大きさ…縦—27・4 糎 横—18・3 糎

見返し…本文共紙

題簽…楮紙 縦—18・3 糎 横—3・7 糎

参考源平盛衰記一 二（四十七 四十八）

内題…参考源平盛衰記卷第一（卷第四十八）

目録題…参考源平盛衰記卷第一目録（卷第四十八目録）

尾題…参考源平盛衰記卷第一終（卷第四十八終）

校訂者（各巻の巻頭所載の氏名）

魯齋今井公濟將興甫 考訂

著軒内藤貞顕仲微甫 重校

砥齋栗山平 担叔甫 重校

引用書目…通計百十六部

本文字高…21・9 糎

半葉（一頁）行数…九行

本文仮名用字…カナ

清濁…ナシ

振り仮名…マレ

句読点…ナシ

符号…ナシ

墨減…マレ

書入…マレ（本文同筆）

貼紙…マレ（本文同筆）

奥書…ナシ

印記 各冊本文第一丁表右上部「御譜御陵両桂之記」「図書寮印」

下部「明治十八年改／御系譜係」

備考

1 京大本・東大本と同一の「古本」の書き入れを有する。一例を挙げる。

又九月十八日九郎判官義経叙從五位下二檢非違使如元（卷四十一）

「新帝御即位付義経蒙院宣并伊勢瀧野戰事」

書陵部本・京大本・東大本いずれも、傍線部「又」をミセケチにして

「古本盛俊渡藤渡条別ニ有」と傍書する。関連箇所（¹³）の古本系盛衰記本文は

以下のとおりである（●は傍線部の記事がないことを示す）。

慶長古活字本—遂ニ亡ニケルコソ無斬ナレ●（卷四十一）「伊勢瀧

野戰」末尾

元和寛永古活字本—遂ニ亡ニケルコソ無斬ナレ、又九月十八日九郎

判官義経叙從五位下二檢非違使如元（卷四十一）「新帝御即位^付義経蒙院宣并伊勢瀧野戰事」末尾

慶長古活字本—同十八日、九郎判官義経叙從五位下二檢非違使如元、

平家ハ讃岐ノ屋嶋ニ有ナ山陽道ヲ打靡カシ（卷四十一）「盛俊渡藤渡」

元和寛永古活字本—同十八日ニ●平家ハ讃岐屋島ニ有ナカラ山陽道

ヲ打靡カシ（卷四十一）「盛綱渡藤戸兒島合戰渡^付海佐介渡海事」

書陵部本・京大本・東大本の「古本」の書き入れについては、稿を改めて

論じる予定である。

2 卷四十三「住吉明神」の注として、『住吉旧記』を挙げている。

住吉旧記云、其荒魂在^ニ筑紫小戸^一、和魂者神功皇后征^ニ三韓^一、託^ニ

皇后体^ニ循^ニ行四方^一遂到^ニ喃州之地^一宣言曰真住吉真住吉国也、因鎮

座其地名曰^ニ住吉^一云々

「住吉旧記云」をミセケチにして「神書抄云」と右傍書をしている。同様

のミセケチは京大本にも存する。

（二〇〇六年九月一日調査）

5 彰考館蔵本（彰考館本）

彰考館本については、国文学研究資料館蔵紙焼写真に基づく調査結果による。

国文学研究資料館整理番号…E718（32—48—2）

請求番号…丑—二一

写本

冊数…完本二四冊（第一冊には、首巻・巻一・巻二を合冊する。巻三

以降は二巻一冊。剣巻ナシ）

本文紙質…楮紙

製本様式…袋綴 綴糸…不明

帙・箱…不明

表紙体裁…原

大きさ…不明

見返し…本文共紙

題簽…源平盛衰記 一二

内題…源平盛衰記一

目録題…源平盛衰記卷第一目録
尾題…源平盛衰記卷第一終
校訂者…明記せず

引用書目…通計四十六部（備考2参照）

半葉（一頁）行数…八行

本文仮名用字…カナ

清濁…ナシ

振り仮名…ナシ

句読点…ナシ

符号…ナシ

墨減…マレ

書入…マレ

貼紙…マレ（備考5参照）

奥書…ナシ

印記…ナシ

備考

1 題簽・目録題・内題・尾題すべて『源平盛衰記』としている。しかし、内容面で『参考源平盛衰記』と認定できる。国文学研究資料館データベースにおいても、『参考源平盛衰記』として掲出している。

2 章段目録は、無刊記整版本『源平盛衰記』と一致している。これに對して他の参考本では、章段の整理を行っている。さらに巻の区切りを變更している場合もある。

3 凡例には、対校に用いた平家物語として以下の五本を挙げている。

- 一 印本者所行干世所謂一方本也
 - 一 八坂本者所謂城方本蓋城元之所伝也
 - 一 鎌倉本者問注所三善康豊所自書者得之干鎌倉故之称也
 - 一 一本者不知所出世之所秘亦異本也
 - 一 長門本者長門赤間関阿弥陀寺所蔵本也
- 通常の『参考源平盛衰記』凡例では、対校に用いた『平家物語』として十一種の伝本を挙げている。右に示した五本は、その十一のなかに含まれている。

4 凡例に掲げる引用書目は、以下の四十六部である。

日本紀、続日本紀、歴代皇紀、一代要紀、公卿補任、百練抄、愚管抄、玉海、吉御記、扶桑略記、帝王編年記、紹運録、続世継、著聞集、金葉集／千載集、新勅撰、栄花物語、大和物語、袋草子、東鑑、鴨長明方丈記、長明発心集／宝物集、保元物語三部（刊本外異本二部）、平治物語三部、元亨釈書、奥羽軍記、徒然草、平家物語五部（刊本外異本四部）、太平記、常州小松寺縁起、日件録、永享記、梅園隨筆、大系図（考訂本）、扶桑拾葉集／通計四十六部

「平家物語 五部」は、対校に用いた伝本として凡例に掲げたものが五本であることと対応している（備考3参照）。他の参考本においては、引用書目のなかに『平家物語』を入れていない。これに對して彰考館本では、保元平治太平記と並記して『平家物語』を挙げている点に特徴がある。引用書目の蒐集・整理ができていない段階を示す特徴として位置づけられる。

5 貼り紙・書き入れとして「如白本」の本文を補う場合がある。

【例1】彰考館本卷三「実定嚴島詣」の注「月に嘯テ○御座ケル」の横に「如白本云、琵琶ヒキ朗詠シテ云々」と貼紙を付す。史蹟集覽本では、当該箇所が次のようになっている。

月二嘯テ（如白本云、琵琶ヒキ朗詠シテ云々）御座ケル

【例2】卷十「中宮御産」の記事「大治二年九月十一日」の注として、彰考館本は、「印本作朔日八坂本作七日非也」と記す。そのすぐ横に「如白本作十二日」の貼紙を付している。当該箇所の史蹟集覽本の注は以下のとおりである。

印本作朔日伊藤本八坂本作七日如白本作十二日皆非也。歴代皇記

一代要記等諸実録、後白河帝降誕本書為正。

傍線部が彰考館本注記と一致し、二重傍線部が貼紙と一致している。例1・例2いずれの場合も、彰考館本の貼紙が後の注に活かされている。同様の例は他にも指摘できる。また、如白本は、他の参考本においては、対校に用いられた十一種のなかに含まれている（備考3・4参照）。

6 以上の特徴から、該本は『参考源平盛衰記』編纂過程の早い段階の本であると考えてよい。

（二〇〇九年三月一日）

6 宮城県立図書館伊達文庫蔵本（伊達文庫本）

請求番号 伊210・3／ケ2―3／50・5

写本

冊数…完本 五〇冊（首巻一冊、巻一から巻四十八各一冊、剣巻一冊）

本文紙質…楮紙

製本様式…袋綴 綴糸…薄茶

帙・箱…ナシ

表紙体裁…原 縹無地

大きさ…縦―28・7 横―20・3 糎

見返し…本文共紙

題簽…楮紙 縦―20・1 横―4・1 糎

参考源平盛衰記一（～四十八）

内題…参考源平盛衰記巻第一（～四十八）

目録題…参考源平盛衰記巻第一目録（～四十八）

尾題…参考源平盛衰記巻第一終（～巻第四十八終）

校訂者（各巻の巻頭所載の氏名）

魯齋今井公済将興甫 考訂

著軒内藤貞顕仲微甫 重校

砥齋栗山平 担叔甫 重校

引用書目…通計百十六部

本文字高…22・4 糎

半葉（一頁） 九行

本文仮名用字…カナ

清濁…ナシ

振り仮名…マレ

句読点…ナシ

符号…ナシ

墨減…ナシ

書入…ナシ

貼紙…ナシ

奥書…ナシ

印記…各冊一丁表右下「宮城県図書館伊達文庫」

備考

1 首巻見返しハガレ、下部に次の貼り紙がある。

「国史第八十号 五十冊／参考源平盛衰記／雑史、四号」

2 巻四十六表紙見返しハガレ、下部に次の貼り紙がある。

「和史／参考源平盛衰記 五十冊」

（二〇〇七年九月六日調査）

7 京都大学付属図書館蔵本（京大本）

請求番号 506／サ／1

写本

冊数…十九冊（二巻一冊。巻九から巻十四・巻十七から巻四十八存）

本文紙質…楮紙

製本様式…袋綴 綴糸…薄茶

帙 箱 ナシ

表紙体裁…原

大きさ…縦―27・5 横―18・9 糎

見返し…本文共紙

題簽（縦―18・1 横―3・4 糎）

参考源平盛衰記 九十

内題…参考源平盛衰記巻第九（～巻第四十八）

目録題…参考源平盛衰記巻第九目録（～巻第四十八目録）

尾題…参考源平盛衰記巻第九終（～巻第四十八終）

校訂者（各巻の巻頭所載の氏名）

魯齋今井公済将興甫 考訂

著軒内藤貞顕仲微甫 重校

砥齋栗山平 担叔甫 重校

本文字高…22・5 糎

半葉（一頁） 九行

本文仮名用字…カナ

清濁…ナシ

振り仮名…マレ

句読点…ナシ

符号…ナシ

墨減…マレ (備考3参照)

書入…マレ (備考2参照)

貼紙…マレ (武具に関わることはある場合、当該箇所下部に貼紙をする場合がある。後人の手になるものか)

奥書…ナシ

印記

各冊一丁表右下に「和学講談所」朱角印、「温故堂文庫」朱角印

および「小室三吉寄贈本」緑角印。

各冊一丁表右上に「明治三三年三月二〇日」の図書館受け入れ印。

各冊一丁表右上「京都帝国大学図書館」朱角印。

備考

1 本来は削除する方針であったはずの漢故事を誤って書写した場合がある。

2 書陵部本・東大本と同一の「古本」(古本系盛衰記本文)の書き入れを有する。

3 卷四十三「住吉明神」の注として、『住吉旧記』を挙げている。

住吉旧記云、其荒魂在二筑紫小戸一、和魂者神功皇后征三韓一、

託皇后体三行四方、遂到三喃州之地一、宣言曰真住吉真住吉国也、

因鎮座其地名曰二住吉一云々

京大本は「住吉旧記云」をミセケチにして「神書抄云」と右傍書をしている。同様のミセケチによる書名の訂正は書陵部本にも存する。

(二〇〇七年九月一三日)

8 東京大学総合図書館蔵本(東大本)

請求番号…G24—825

写本

冊数…二六冊(卷十三から卷二十、卷二十五から卷四十四)

本文紙質…楮紙

製本様式…袋綴

綴糸…濃茶(綴じ直し)

帙・箱…ナシ

表紙体裁…原、縹無地、蝶・燕文様型押し

大きさ…縦—26・8 横—18・8 横

見返し…本文共紙

題簽…(縦—18・5 横—3・9 横)

参考源平盛衰記 十三

内題…参考源平盛衰記卷第十三(一四十四)

目録題…参考源平盛衰記第十三目録(一四十四目録)

尾題…参考源平盛衰記第十三終(一四十四終)

校訂者(各巻の巻頭所載の氏名)

魯齋今井公濟將興甫 考訂

著軒内藤貞顕仲微甫 重校

砥齋栗山平 担叔甫 重校

本文字高…22・6 横

半葉(一頁) 九行

本文仮名用字…カナ

清濁…ナシ

振り仮名…マレ

句読点…ナシ

符号…ナシ

墨減…ナシ

書入…「此歌一行二書クヘシ」等、書写上の注意を記す場合がある。

貼紙…ナシ

奥書…ナシ

印記 各冊本文第一丁表右上部「南葵文庫」

備考

1 南葵文庫旧蔵

2 京大本・書陵部本と同一の「古本」(古本系盛衰記本文)の書き入れを有する(書陵部本備考2参照)。

(二〇〇六年一月七六日調査)

9 無窮会平沼文庫蔵本(平沼本)

請求番号 五四七一

写本

冊数…四六冊（卷四十七・卷四十八欠。卷三十五補写）

本文紙質…楮紙

製本様式…袋綴 綴糸…鶯色

帙箱…ナシ

表紙体裁…原 茶横刷き目

大きさ…縦—23・4 糎 横—17・1 糎

見返し…本文共紙

題簽…楮紙 縦—14・9 糎 横—3・3 糎

参考源平盛衰記一（〜四十六）

内題…参考源平盛衰記卷第一（〜四十六）

目録題…参考源平盛衰記卷第一目録（〜四十六）

尾題…参考源平盛衰記卷第一終（〜四十六）

校訂者（各巻の巻頭所載の氏名）

魯齋今井公濟将興甫 考訂

著軒内藤貞顕仲微甫 重校

砥齋栗山平 担叔甫 重校

本文字高…18 糎

半葉（一頁）九行

本文仮名用字…カナ

清濁…ナシ

振り仮名…マレ

句読点…ナシ

符号…ナシ

墨減…マレ

書入…マレ

貼紙…ナシ

奥書…ナシ

印記…各冊一丁表右上「武溪文庫」「南天荘」

各冊一丁表右下「新堀文庫」「無窮会神習文庫」

各冊最終丁裏「武溪文庫」

備考

1 『平沼文庫蔵書目録』第二輯に「五四七一 参考源平盛衰記 首尾欠井

上通泰氏旧蔵 写四六」とある。

2 第一冊表見返しに以下の墨書有り

改訂史蹟集覧編外ニ収メタリ。但コレトハ別本ナリ。惜ムベシ首

巻ト尾二巻と缺ケタリ。

3 卷三十五補写。表見返しに「此一冊補写」と墨書。

4 卷三以下のメモが挟まれていた（本文同筆）

公卿補任十五承安四年ノ條ニ、平重盛（三十七）七月八日右大

将同廿日拝賀邦綱卿以下公卿十人雲各廿人從

（二〇〇八年五月二十八日調査）

10 鹿兒島大学附属図書館玉里文庫蔵本（玉里文庫本）

請求番号 天48/540（1〜50）

写本

冊数…完本 五〇冊（首巻一冊・劍巻一冊、巻一から卷四十八各一冊）

本文紙質…楮紙

製本様式…袋綴 綴糸…濃茶（全冊綴じ直した形跡アリ）

箱（寸法 縦…32・8（30・8）糎 横24・8（22・8）糎

高さ55・6 糎）（内は内法寸法）

箱正面に「四拾八番／参考源平盛衰記五十冊」と墨書

表紙体裁…原 鳥の子、薄茶刷き目

「軍拾七番」の墨書貼紙

大きさ…縦—28・9 糎 横—20・8 糎

見返し…本文共紙

題簽…楮紙 縦—20・4 糎 横—4・2 糎

参考源平盛衰記一（〜四十八）

内題…参考源平盛衰記卷第一（〜四十八）

目録題…参考源平盛衰記卷第一目録（〜四十八）

尾題…参考源平盛衰記卷第一終（〜四十八）

校訂者氏名

魯齋今井公濟将興甫 考訂

著軒内藤貞顕仲微甫 重校

引用書目…通計百四部

本文字高…

半葉（一頁）九行

本文仮名用字…カナ

清濁…ナシ

振り仮名…マレ

句読点…ナシ

符号…ナシ

墨減…多数

書入…多数

貼紙…マレ

備考

1 各冊巻末に書写者の氏名を記す。書写者によって書写の姿勢に違いがあると考えられるので、調査の際に気づいた各冊の特徴を（ ）内に記す。

首巻 大迫藤十郎謹写之

剣巻 土持孫兵衛田部永徳謹書

巻一 桑山十之助謹写之

巻二 八木平太郎謹写之

巻三 川井嘉一郎謹写之

巻四 千頭欣一郎写之

巻五 桑山十之助謹写之（編集上の注意に相当する頭書多し。貼り紙、メモ等の写し多し）

巻六 川南清兵衛写之

巻七 池田仲蔵武行謹写（「本ノママ」という注記多し。朱書による本文訂正多し。）

巻八 村岡一郎次写之（朱書による訂正あり）

巻九 黒葛原吉左衛門藤原兼照謹写

巻十 八木平太郎謹写之

巻十一 志木正兵衛（「本ノママ」という注記多し）

巻十二 黒葛原吉左衛門藤原兼照謹写（巻九と同名。「本ノママ」という注記多し。十行で記した箇所に対して「此丁九行」注意書きを記す）

巻十三 村岡一郎次写之（巻八と同名。「本書一行脱ス」）

巻十四 志木正兵衛（巻十一と同名。「本ノママ」という注記多し。虫損、破れまで忠実に模写する）

巻十五 川井嘉一郎謹写之（巻三と同名。「本書貼紙」「本書白紙ヲ覆フ」「本ノママ」等、親本の状態を丁寧に注記する）

巻十六 千頭欣一郎写之（巻四に同じ）

巻十七 川井嘉一郎謹写之（巻三・巻十五と同名）

巻十八 池田仲蔵武行謹写（巻七と同名）

巻十九 田代宗之丞写之

巻二十 左近允清兵衛純以謹写

巻二十一 山田壮右衛門謹写之

巻二十二 志木正兵衛（巻十一・十四と同名）

巻二十三 脇田藤次郎謹写

巻二十四 田代宗之丞写之（巻十九と同名）

巻二十五 桑山十之助謹写之（巻五と同名）

巻二十六 村岡一郎次写之（巻八・十三と同名）

巻二十七 志木正兵衛（巻十一・十四・二十二と同名）

巻二十八 脇田藤次郎謹写（巻二十三と同名）

巻二十九 川井嘉一郎謹写之（巻三・十五・十七と同名）

巻三十 志木正兵衛（巻十一・十四・二十二・二十七と同名）

巻三十一 村岡一郎次写之（巻八・十三・二十六と同名）

巻三十二 黒葛原吉左衛門写之

巻三十三 桑山十之助謹写之（巻五・二十五と同名）

巻三十四 土持孫兵衛田部永徳謹書（剣巻と同名）

巻三十五 志木正兵衛（巻十一・十四・二十二・二十七・三十と同名）

巻三十六 八木平太郎謹写之（巻二・巻十と同名）

巻三十七 桑山十之助謹写之（巻五・二十五・三十三と同名）

巻三十八 左近允清兵衛純以謹写（巻二十と同名）

巻三十九 桑山十之助謹写之（巻五・二十五・三十三と同名）

巻四十 土持孫兵衛田部永徳謹書（剣巻・巻三十四と同名）

巻四十一 黒葛原吉左衛門藤原兼照謹写（巻九と同名）

巻四十二 左近允清兵衛純以謹写（巻二十・三十八と同名）

巻四十三 田代宗之丞写之（巻十九と同名）

- 卷四十四 川井嘉一郎謹写之（卷三・十五・十七・二十九と同名）
 卷四十五 桑山十之助謹写之（卷五・二十五・三十三・三十三と同名）
 卷四十六 志木正兵衛（卷十一・十四・二十一・二十七・三十・三十五と同名）
 卷四十七 村岡一郎次写之（卷八・十三・二十六・三十一と同名）
 卷四十八 脇田藤次郎謹写（卷二十三・二十八と同名）
 2 彰考館における編纂途上の本を丁寧（ていねい）に書写したもの。書写者によって書写の姿勢が異なり、なかには、虫損・破損の跡まで丁寧に模写したものもある。

（二〇〇七年三月二日調査）

11 津市津図書館有造館文庫蔵本（有造館文庫本）

写本

- 冊数…完本四八冊（第一冊には凡例・引用書目と巻一を合冊）
 本文紙質（楮紙）
 製本様式…袋綴 綴糸…白
 帙／箱 ナシ
 表紙体裁…原 薄茶横刷き目
 大きさ…縦一・二六・四糎 横一・一八・二糎
 見返し…本文共紙
 題簽…ナシ

表紙右上部に「参考源平盛衰記 巻第一（一四十八）」と墨書で打付書き

- 内題…参考源平盛衰記巻第一（一四十八）
 目録題…参考源平盛衰記巻第一目録（一四十八）
 尾題…参考源平盛衰記巻第一終（一四十七）

卷四十二・四十三・四十八は尾題ナシ

校訂者（各巻の巻頭所載の氏名）

- 魯齋今井公濟将興甫 考訂
 著軒内藤貞顕仲微甫 重校
 砥齋栗山平 担叔甫 重校
 引用書目…通計百十六部

本文字高…21・7糎

半葉（一頁）九行

目次…九行

本文仮名用字…カナ

清濁…ナシ

振り仮名…マレ

句読点…ナシ

符号…ナシ

墨減…マレ

書入…マレ

貼紙…ナシ

奥書…ナシ

印記…各冊 第一丁表右上部「有造館蔵書印」

各冊 第一丁表右下部「津市図書館蔵書之印」

備考

- 1 『有造館文庫目録』（津市図書館発行、平成一六年）五一頁所載。「江戸後期写」とする。
- 2 本来は削除する方針であつたはずの漢故事を誤って書写した場合がある。
- 3 卷三十七二九丁裏末尾に「此間落丈有か」の墨書

（二〇〇九年五月二日調査）

付 改訂史蹟集覧本（底本 徳川昭武本）

徳川昭武本を底本として、明治十五年三月から同十七年八月までの間に、数冊ずつ刊行したものである。奥付を以下に示す。

明治十五年三月三十日板権免許

同十七年八月二十六日出版 大尾

著者相続人／兼出版人 東京府華族／徳川昭武／本所区新小梅町一

出版発兌 東京深川公園／近藤活版所

現在、一般に『参考源平盛衰記』の本文として知られるのは、この史蹟集覧本である。

この他に同名で異なる内容のものが二種存する。『参考源平盛衰記（故実参考源平盛衰記）』（写本）と、明治十七年に信濃新聞社が刊行した『参考源平盛衰記』である。いずれも、本稿で報告した『参考源平盛衰記』とは全く異なる作品である。前者については松尾葦江氏の紹介がある¹⁴⁾。

後者は『源平盛衰記』と『義経記』を併せて、読み物風に大幅に書き改めたものである。さらに巻十二は、その大部分が源義経の物語となっている。なかでも「井上左衛門義経を見通す事并弁慶安宅関にて勸進帳を読む事」「義経主従如意渡を越る事并山伏問答事」の二段段では、歌舞伎「勸進帳」の詞章をそのまま嵌め込み、平泉に至るまでの義経一行の苦難を描いている。物語全体の最終章段名は「義経主従蝦夷渡海的事并海尊都に止まる事」である。義経伝説の広がりとして『源平盛衰記』享受双方に関わる興味深い例として指摘しておく。

三 詳略二本の『参考源平盛衰記』（元禄本と享保本）

現存伝本の系統分類の基準とするために、代表的な二本について比較を行う。すなわち史蹟集覧本（徳川昭武本）と内閣A本である。

近藤瓶城は、史蹟集覧本の跋文において『参考源平盛衰記』には「詳略二本」があると述べている（傍線筆者）。

参考源平盛衰記四十八巻、併首一卷合為四十六冊、是水戸彰考館所蔵完本也。ア余前見上野博物館本塙氏温古堂本、二書同出其引用平語数本、及東鑑諸実録者、イ摘句断章弁章各書異同耳。ウ余当時較之太平記等本、以今井内藤二氏参考原本、為止干如斯者。壬午歲及編纂史籍集覧、工請徳川氏抵水戸閔彰考秘館、見此本如斯引拠完全者、始知参考本詳略二本。夫考据之学寧繁無失干簡、況此本金甌無欠乎、急雇兎毫氏作副本、乞館督栗田寛氏校訂一過、余亦通読、漫為句読、以付手民云

明治十七年七月

近藤瓶城

近藤は、『参考源平盛衰記』を史蹟集覧に収載するにあたり、まず上野博物館本と塙氏温古堂本を調査した（傍線部¹⁵⁾）。その結果、この二本の注釈態度について「摘句断章弁章各書異同耳」と評した（傍線部イ）。つまり近藤は、この二本が『参考太平記』等の参考本に比して、諸本との対校が簡略すぎると判断したのである。近藤がこのように評価したのは、『参

考太平記』をはじめとする他の参考本と比較した結果であった（傍線部ウ）。そこで近藤は、彰考館本を調査し、水戸彰考館本四十六冊が「引拠完全」なる本であると確信し、史蹟集覧本の底本として選んだ（傍線部工）。跋文には彰考館本の素性については記していないが、先に示した奥付から徳川昭武本であるとわかる。

現存『参考源平盛衰記』伝本それぞれの位置づけを行うためには、まず「略本」と「詳本」の特徴を把握しておく必要がある。「詳本」の代表的伝本として史蹟集覧本を、「略本」の代表的伝本として内閣A本を取り上げる。

内閣A本は、享保十六年の浄書本であり、長年に亘る編纂作業を経た『参考源平盛衰記』の完成形態にあたる。

一方の史蹟集覧本は、近藤が述べたとおり『参考太平記』等他の参考本とその注釈姿勢が近い。さらに各巻巻頭所載の校訂者が「今井・内藤」の二氏であり、『参考太平記』等他の参考本と一致している。以上の理由から史蹟集覧本は、元禄十五年の第一次完成時の形態を留めるものと判断してよい。

すなわち、近藤の言う「詳本」を元禄時の第一次完成本、「略本」を享保十六年の浄書本ととらえることができる¹⁶⁾。

両者の形態的な相違点を整理すると以下の六点となる。

- ①校訂者氏名
- ②引用書目
- ③凡例
- ④宣衡本の消滅
- ⑤巻の区切り
- ⑥巻四十八建礼門院関連記事の整理

それぞれについて具体的に検討する。

第一に、本文第一丁表に示された校訂者の相違がある。史蹟集覧本では、以下の二名である。

魯齋今井公濟将興甫 考訂
著軒内藤貞顕仲微甫 重校
内閣A本ではこの二名に加えて次の一名の名が挙がっている。
砥齋栗山平 担叔甫 重校

校訂者氏名によって、当該伝本の系統について、ある程度の見当をつけることができる。

第二に注に使用した引用書目の相違がある。凡例末尾所載の引用書目一覧によれば、史蹟集覧本は百四種、内閣A本は百十六種を注に用いている。しかし、長年に亘る編集の過程で引用書が加えられた結果、十二種が増えたというわけではない。内閣A本の段階で削除された書目と、追加された書目とがある。削除された引用書は以下の十一種である(五十音順に示す)。

禁秘抄／古語拾遺／聖德太子伝／岡崎本平治物語／住吉旧記／大系図
付諸氏家譜／扶桑拾葉集／本朝長曆／本朝編年録／本朝文粹／増鏡
このうち、『大系図付諸氏家譜』は、『尊卑分脈』と同一書であり、引用書目の整理統一の結果、削除されたものである。¹⁸⁾

一方、略本で追加された書目は以下の二十三種である。

大鏡裏書／菅家文章／貴女抄／金渡墨跡因縁／魏徵碑文／皇胤紹運録／後宮略伝／齋院記／職原抄／神書抄／貞観政要／続日本後紀／新撰姓氏録／徒然草／南都巡礼記／日本長曆／女院小伝／常陸国正宗寺所藏系図／翻訳名義集／三善清行意見封事／文徳実録／和漢合運／和漢合符

右のうち『住吉旧記』と『神書抄』は、引用記事が同文であり、引用書目を訂正したと考えられる。史蹟集覧本では、巻四十三「住吉明神」の注として、『住吉旧記』を挙げている。

住吉旧記云、其荒魂在筑紫小戸、和魂者神功皇后征三韓、託皇
后体一循行四方、遂到三喃州之地、宣言曰真住吉真住吉国也、因鎮座其
地名曰二住吉一云々

内閣A本では、同文の注記を載せながら、引用書目のみが「神書抄云」となっている。書陵部本・京大本では、「住吉旧記」をミセケチにし、「神書抄」と書名を訂正している。『住吉旧記』も『神書抄』も現存せず、その詳細は未詳であるが、京大本・書陵部本は、浄書本完成までの中間形態と考えられる。¹⁹⁾

引用書目の相違だけでも、難渋を極めたという改訂作業の跡をうかがうことができる。

第三に凡例の相違(改訂)がある。史蹟集覧本の凡例冒頭は、以下のとおりである。

撰盛衰記平家物語者。衆説不知孰是也。盛衰記蓋平家物語別名也。これに對して、内閣A本の凡例は以下のように始まる。

源平盛衰記不詳何人所撰。其所記年代事実大抵与平家物語相類而同異詳略互有得失。

ここには凡例の冒頭部分のみを掲げたが、次に示す「宣衡本」の問題も含めて凡例全体が書き改められたと考えてよい。

第四に凡例において「宣衡本」に言及するか否かの相違がある。²⁰⁾

史籍集覧本凡例には、底本とした盛衰記本文への疑問および校訂に用いた宣衡本について以下のような言及がある。

一 本書字或有「伝訛」。或用「俗字」而不「通者」。註「其下」云。旧誤作「某」。今当「作」某。或有「脱字衍文」。則因「宣衡本」。補「之」訂之。

一 称「宣衡本」者、中御門正二位大納言宣衡卿所「手書」之源平盛衰記是也。故称「之」。

内閣A本の当該箇所は以下のとおりであり、宣衡本には言及しない。

本書有衍脱錯誤而文義難通者、拠異本或実録直刊之、而注云某旧誤作某、不可考証者、注云某不解蓋有誤、其他不関事実牒狀願文之類不在此例、

内閣A本では「異本或実録」によって本文を訂正すると述べており、史蹟集覧本にあった宣衡本が消えている。

史蹟集覧本・内閣A本ともに、底本とした盛衰記本文を訂正した例を挙げる。

梁ノ朱昇(朱昇旧誤作周伊、今改之)(巻一「平家繁盛并得長寿院導師事」)

次に、史籍集覧本が宣衡本を用いて本文訂正をした例を示す。

アルシナキ宿ノ軒端ニ句ラメ(宣衡本長門本句梅)(巻二「清盛息女事」)
巻二「清盛息女」において、清盛五女が詠んだ和歌の一部にあたる。『参考源平盛衰記』の本文を掲げ、傍線部については古本系盛衰記伝本の異同を示した。「句ラメ」では意味が通らないと判断した『参考源平盛衰記』の編者が、宣衡本と長門本の本文「句梅」を掲げたものと考えられる。これに對して当該箇所の内閣A本の注は以下のとおりであり、宣衡本には言及しない。

アルシナキ宿ノ軒端ニ句ラメ〔長門本句梅〕

源平盛衰記 慶長古活字本・静嘉堂本・蓬左本「ムメ／梅」元和寛永古活字本「ラメ」

現在、参考本の中から拾い出すことができた宣衡本文は、右の一例のみである。また、内閣A本が凡例から宣衡本を除いただけでなく、注からも除外した理由は不明である。

第五に、卷三十九と卷四十の区切りの相違がある。

史蹟集覧本

卷三十九末尾の章段「時頼横笛事」

卷四十冒頭の章段「法輪寺事付中将相見瀧口并高野山事」

内閣A本

卷三十九末尾の章段「時頼横笛付法輪寺事」法輪寺事旧在後卷首

卷四十冒頭の章段「中将相見瀧口并高野山事」

「法輪寺事」は瀧口横笛に関わる傍系説話であり、維盛が瀧口と出会う巻四十冒頭の記事とは直接つながらない。内閣A本は、巻四十冒頭に位置していた「法輪寺事」を卷三十九末尾に移し、瀧口横笛説話としてのまとまりを持たせている。

第六に内閣A本では、巻四十八の建礼門院関連記事を整理している（←は目録の下の割注であることを示す）。

史蹟集覧本（卷四十八目録）

女院吉田御住居同御出家事

〔此段只有長門本、按此段所載既出干第四十四卷、今重複可并見〕

女院寂光院入御事

内閣A本（卷四十八目録）

女院寂光院入御事

〔前段載女院吉田女院吉田御住居同御出家事既出干第四十四卷、故徐之〕

史蹟集覧本では、吉田の住まいでの建礼門院については既に巻四十四に記事があり巻四十八の当該章段は重複している、と指摘している。これに対して内閣A本では、「女院吉田御住居同御出家事」の章段を削除し、巻四十四との記事の重複によって削除した旨を記している。

以上が、史蹟集覧本と内閣A本の形態上の相違である。もっとも根本的

な相違は、注釈姿勢そのものに大きな変化が生じたことである。近藤はそれを「如斯引拠完全者（史蹟集覧本）」と、「摘句断章弁章各書異同耳（内閣A本）」と評した。しかしながら、享保十六年に浄書本として幕府に献上されたのは、内閣A本（享保本）であり編纂・改訂作業に携わった人々にとっては、享保本の在り方が『参考源平盛衰記』の完成であった。

『参考源平盛衰記』編纂の企画から享保十六年の浄書本完成に至るまでには、何段階にもわたる参考本が存在していたと考えられる。個々について、詳細な検討を加えるべきところであるが、現段階における位置付けの見通しを述べておく。

詳本（元禄本）の系統

内閣B本（②）・玉里文庫本・改訂史蹟集覧本（徳川昭武本）

略本（享保本）の系統

1 浄書本とその写し

内閣A本・内閣B本（①）・伊達文庫本・

2 浄書本完成に至るまでの中間形態を留める本

書陵部本・京大本・東大本・有造館文庫本

3 浄書本をもとに独自の注を加えた本

静嘉堂本

さらに現存する彰考館本四十六冊は、編纂過程の早い段階の姿を留めるものであると考えてよい。

個々の伝本に関する詳細な検討については、今後の課題としたい。

謝辞 貴重な史料の閲覧をご許可くださいました関連図書館に篤く御礼申し上げます。

注

（1）久保田収氏「水戸義公の学問的業績」『大日本史の研究』日本学協会・立花書房、昭和32年

（2）茨城県史料 近世思想編 大日本史編纂記録 429ページ（茨城県立歴史館編集、平成元年三月刊）

（3）元禄四年刊の『参考太平記』には、この刊行目録は載せていない。

（4）・（5）『大日本史編纂記録』245「盛衰記刪定記事」（京都大学文学部

尚古館古文書室蔵

- (6) 注(1)『大日本史の研究』。松尾葦江氏「参考源平盛衰記について」『新定源平盛衰記』第二巻所収一九八九年、新人物往来社。松尾葦江氏「参考源平盛衰記研究ノート(1)」「(4)」『新定源平盛衰記』月報1・2・3・5(一九八九年)一九九一年、新人物往来社
- (7) 高知県立図書館および阪急池田文庫については現在の所在は不明である。また、無窮会神習文庫本は抄本である。
- (8) 『津市図書館蔵 有造館文庫目録』(津市図書館発行、平成一六年)五一頁所載。
- (9) 賜蘆文庫については、鈴木孝庸氏「宮崎記念館蔵 平家物語(平家吟譜)について」(『平家吟譜 宮崎記念館蔵平家物語』瑞木書房、二〇〇七年十二月)四九九頁に指摘がある。
- (10) 拙稿「成賞堂文庫本『源平盛衰記』訓読索引稿」(『大阪工業大学研究紀要』人文社会編第五〇巻二号、二〇〇六年三月)参照。
- (11) 二〇〇八年一月三日(日)に開催された軍記・語り物研究会第三八〇回例会(於・青山学院大学)において、『参考源平盛衰記』所引 古本系『源平盛衰記』写本の本文―静嘉堂文庫本の検討を中心として―と題して口頭発表を行っている。
- (12) 拙著『源平盛衰記の基礎的研究』(二〇〇五年二月、和泉書院)
- (13) 注(12) 拙著参照。
- (14) 松尾氏注(6)「参考源平盛衰記について」参照。
- (15) 上野博物館本は現在の所在不明。塙氏温古堂本は京都大学付属図書館蔵本が該当する。しかし、調査報告に記したとおり完本ではない。
- (16) 史蹟集覧本(徳川昭武本)を、元禄時の第一次完成本とすることに、はもう少し慎重を期すかもしれないが、他の参考本との比較から、その蓋然性は高いと考える。
- (17) 史蹟集覧本の引用書目については注(6) 松尾氏に略解題がある。
- (18) 皆川完一氏「『尊卑分脈』書名考」(新訂増補『国史大系』月報62)
- (19) 書陵部本・京大本・東大本には、浄書本完成に至るまでの中間形態の痕跡が他にも指摘できる。
- (20) 拙稿「蓬左文庫蔵『源平盛衰記』写本再考―書写者玄菴三級の検討を通して―」(『軍記物語の窓』第三集、二〇〇七年十二月、和泉書院)。

院)。中御門宣衡は、後陽成院近臣として活躍した人物であるだけでなく、蓬左文庫蔵『源平盛衰記』写本を書写した三級とも近い関係にあった。後陽成院の周辺にいた二人の人物が、盛衰記の写本作成に携わっていたという点は興味深い。